

■ 書 評



同時代の精神病理 ポリフォニーとしてのモダン をどう生きるか

鈴木國文 著
中山書店
2014年4月 336頁
本体価格 3,800円+税

自閉スペクトラム症も解離性同一性障害も PTSD も、30年前の評者精神科入局時のクルズでは教わらなかった。うつ病の小精神療法通りの外来診療を行っていた。「この三十年ほどの間に、精神の病態がどのように変化し、また、それを取り巻く社会がどのような変貌を遂げたか」という著者の「問い」は、精神科医のみならず、現代社会を生きる中高年者なら、いや、結局誰もが発したくなるだろう。その精神と社会の結び目の問題を扱う際に、著者が念頭に置いているのは、ラカンが読み解いたフロイトの理論である。また、本書では、社会学、哲学、精神分析などさまざまな領域から、多様なテキストを引いており、18世紀の啓蒙時代以降の歴史的過去へと遡り、そこから今日の社会を照射しようと試みている。「この三十年の変化がなぜ引き起こされているのか、その要因について考えてみようとするならば、どうしても近代社会全体の成り立ちについて一定の視野をもたなければならない」からだ。著者は「ポスト・モダン」という視点から時代を見ることは、大きな危険が含まれると考える。確かに、「近代(モダン)」は、前の時代の否定を繰り返しつつ進んできたが、新たな時代には、前の時代の何がしかが、いわば何層にも折り畳まれたパイ生地のように形を変えて残存しており、きわめて多声的(ポリフォニック)な様相を呈しているというのである。明治時代の東京にも江戸の気風は残っていた。

各論として、統合失調症、うつ病、神経症、境界例、解離性同一性障害・PTSDなど心因性精神障害、自閉症スペクトラム障害の同時代の精神病

理・病態の変容が、自験例・著名例をまじえながら、社会の変化とともに丹念に弁証法的に検討される。すべて書き下ろしである。その考察を通して著者が取り出したのは、人格概念の弱体化という点である。葛藤概念が後退するのに伴い、神経症的なドラマの機能が弱くなるのを見、あるいは「社会的な鎧」を支えていた理想という次元が弱まることによって、役割同一性そのものが機能しなくなり、うつ病像が変化するのを見、さらには、統合失調症という病態において、人格を舞台に生じていたさまざまな症状が見えにくくなっているのを見るのである。著者が指摘するように、境界例と呼ばれた病態が1980年にDSM-IIIの中で「パーソナリティの障害」として括られ、2013年のDSM-5においては、「パーソナリティの障害」という第II軸自体がなくなるのに伴い、一般の障害の中に並べられることになる精神医学の流れには、人格概念の高まりとその傷つき、そしてその後退という流れが透けて見える。

評者が個人的に興味をもったのは、笠原への言及である。笠原も引用する三浦雅土著『青春の終焉』の論考に沿いながら、「青春」が本当に終焉したかを考察し、笠原が最近しきりに話題にするエイの「器質・臨床間の乖離(écart organo-clinique)」にも触れ、内因性精神障害としての「非定型精神病」概念が、心因性ヒステリー類縁のもうろう状態を呈しうるのはその例であるとまとめる。何より、「うつ病」の病態変化の項では、笠原を丁寧に引用し、精神病理学の命脈は、まさに内因概念の存否にこそあると笠原は考えていると結論する。これらの点は、笠原が、青年期・統合失調症・うつ病の精神病理学に撒いた種を、著者が継承発展させる覚悟を示したように見えた。どっこい精神病理名古屋学派は健在なのである。ここに本書を推薦する次第である。

今年には著者の生り年であろう。著者近年の論文集である『精神病理学から何が見えるか』(批評社刊)、また共著として『「ひきこもり」に何を見るか-グローバル化する世界と孤立する個人』(青土社刊)も、相次いで出版されている。

(西岡和郎)